

令和 2 年 6 月 10 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02536

研究課題名(和文) 初期キリスト教偽名文書の歴史的・文学的研究

研究課題名(英文) A Historical and Literary Study on the Early Christian Pseudonymous Writings

研究代表者

辻 学 (Tsuji, Manabu)

広島大学・総合科学研究科・教授

研究者番号：50299046

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、新約聖書の中にある偽名書簡で、パウロ以外の人物(ヤコブ、ペトロ、ユダ)の名前を冠した4通の書簡、さらに新約聖書以降に著された初期キリスト教文献の中にある偽名文書を取り上げ、初期キリスト教の中でそのような偽名文書が作られた歴史的背景また文学史的意義を明らかにしようとしている。パウロ以外の人物を騙る偽名文書には、パウロ系統には属さないキリスト教徒たちの思想が、パウロ的キリスト教に対抗する形で(あるいは補完する形で)反映している。つまり偽名文書には、様々なキリスト教の流れが、「草創期」の人物の名前を借りた偽名文書によって自らの理解を正当化していく過程が見て取れるのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、新約聖書および初期キリスト教文献の中に、偽名を用いた文書が擬似パウロ書簡の他にも数々見られるという事実を、個々の文書の分析を通して示すと共に、なぜそのような偽名文書が初期キリスト教の歴史の中で生み出されたのかという問題を、キリスト教の歴史および西洋古典の文学史という背景を考慮することによって明らかにしている。

研究成果の概要(英文)：This research project first treats four pseudonymous epistles in the New Testament which bear the names of James, Peter, and Jude. Then, it surveys pseudonymous writings in the post-New Testament time (2nd Century C.E.). It aims at clarifying the historical and literary background of these early Christian pseudonymous writings.

After the four-year-survey, the project led to a conclusion that the New Testament pseudonymous epistles which bear the names of James, Peter, and Jude were produced by non-Pauline Christian communities in the post-Pauline time. They used the names of earliest Christian leaders in order to give their writings the equal authority to that of Pauline epistles. These pseudonymous writings reflect the understanding of Christianity which differs from that of Paul and his churches.

研究分野：新約聖書学

キーワード：新約聖書 偽名文書 初期キリスト教史 パウロ ヤコブ ペトロ ユダ

1. 研究開始当初の背景

本研究は、新約聖書中の偽名文書を、1～3世紀の初期キリスト教文学史全体の流れの中で捉え、その成立事情や意図を明らかにしようとするものである。新約聖書の中には、パウロやペトロ、イエスの弟ヤコブやユダなど、最初期キリスト教の指導者が書いた体裁をとる偽名文書が多く含まれている。これら新約偽名文書に関する研究は、欧米においても、いくつかの例外はあるものの、盛んとまでは言えないが、とくに日本ではきわめて貧弱であり、ほとんど研究が進んでいない。日本の新約聖書研究はその大半が、今なお福音書と真正パウロ書簡を対象としており、このような偽名文書は「思想的価値」が低いとして、その分析に取り組む研究者がいまだに極めて少ないのが現状である。そのような状況の中で本研究は、日本の新約聖書学においてはほとんど顧みられてこなかった分野の遅れを補いつつ、国際的な学術的貢献を果たす狙いを持ってスタートした。

海外における従来の偽名文書研究は、新約聖書というキリスト教の正典に「偽り」があるという事実を正当なものとして説明しようとする護教的な動機から始まったものが多い。真筆・偽作の判断基準をめぐる議論や、偽作の神学思想的意図に関する議論はしばしばなされてきた。しかし、新約の偽名文書の一つの文学的現象として取り上げ、文学的伝統や歴史的状况との関わりから総合的に捉えようとする研究は、欧米の新約聖書学でもまだ端緒についたばかりである。すでに自分の名前で文書を著す教会指導者も登場し始めていた(例、アンティオキアのイグナティオス、スミルナのポリュカルポス)紀元1世紀後半以降の時代において、なぜ偽名文書が作られたのか、そして擬似パウロ書簡だけでなく、ヤコブやペトロ、ユダといった最初期キリスト教の指導者たちの名前を冠した偽名書簡も作られた理由を本研究は明らかにしようとしている。

新約聖書中の偽名文書は、新約聖書を含む初期キリスト教文学史の流れの中で生まれてきたものであり、聖書外の初期キリスト教文献にも偽名文書が存在する。これら聖書外の偽名文書も併せて考察することで、初期キリスト教文学史の一部として新約偽名文書を捉えることが可能となり、新約聖書に収められた偽名文書に固有の事情も明らかになることが期待される。

2. 研究の目的

本研究は、従来取り組んできた、新約聖書中の偽名文書分析の最終段階となるものである。新約聖書の1/3以上は、パウロ、ペトロ、ヤコブ、ユダといった初期キリスト教の重要人物の名前を用いた偽名書簡であるが、新約聖書外の初期キリスト教文献にも同様の偽名文書が存在する。日本では未だ研究がほとんど進んでいない、紀元1世紀後半から3世紀にかけて成立したこれらの文書を分析し、「偽名文書」という文学類型の歴史及びそれが初期キリスト教の中で多用された歴史的事情や意図を明らかにすることで、初期キリスト教文学史研究への大きな貢献が期待される。すでに、擬似パウロ書簡群を構成する6文書については、分析を行っており、その成果も公表している(辻学『偽名書簡の謎を解く パウロなき後のキリスト教』新教出版社、2013年、ほか)。そこで今回は、研究全体の完成を目指して、残る新約偽名文書及び(新約偽名文書以後に成立した)初期キリスト教偽名文書を分析することとした。

3. 研究の方法

本研究は、擬似パウロ書簡以外の新約偽名書簡および新約聖書外の初期キリスト教偽名文書を個々に取り上げて、偽作の文学的手法を個別に考察し、初期キリスト教史のどのような状況に働きかけようとしたものであるかを明らかにする。個々の書簡分析をまとめた後には、その成果を擬似パウロ書簡研究の結果と統合して、初期キリスト教偽名文書全体の成立史を、初期キリスト教および西洋古典の文学史の一部として描くこと、およびそれらがキリスト教の中で正典へと受容されるに至った要因を考察する作業へと進み、初期キリスト教偽名文書研究全体の総括とする。

4年間の研究期間で、ヤコブ書簡、第一ペトロ書簡、第二ペトロ書簡およびユダ書簡、新約聖書以降に記された初期キリスト教偽名文書を順々に分析対象とする。それぞれの文書についてまず、真筆性に関する議論を整理した後、上記の通り、偽作の文学手法および文書成立の歴史的背景を明らかにする。

4. 研究成果

ヤコブ書簡については、これまで発表してきた拙論に対する諸批判を、聖書本文の分析に基づいて検証する作業に従事したが、イエスの兄弟である「主の兄弟ヤコブ」を著者とする偽名文書であり、ヤコブが全キリスト教徒に向けて書いた「キリスト教ディアスポラ書簡」という、ユダヤ教の文学的伝統を継承した文書であること、そして内容的には、パウロおよびパウロ的キリスト教に対する批判を意図したものであるという拙論を変えるべき理由はとくに見当たらなかった。そこでこの点については、すぐに学術論文にまとめるのではなく、後に研究全体をまとめた単著を発行する際にまとめて記載することとした。

第一ペトロ書簡については、文学類型上はヤコブ書と同じく、「キリスト教ディアスポラ書簡」

の伝統を引くが、内容的にはヤコブ書簡と逆に、「親パウロ」的性格を有する文書であり、ペトロがパウロの思想を援護するような体裁になっていることがわかった。この点については、2018年10月19～21日に台湾で開催された、国際新約聖書学会アジア太平洋連携委員会大会において口頭発表し、その内容に基づいて、2019年度に論文を公表した。

第二ペトロ書簡・ユダ書簡、また初期キリスト教偽名文書についても、分析を進めており、とくに前者については、2020年度中に学会で口頭発表をする予定にしていたが、コロナウィルス流行のため諸学会が軒並み中止に追い込まれており、口頭発表の計画も変更を余儀なくされている。学会での発表を経ることなく、学術論文として公表する可能性も考慮している。第二ペトロ書簡・ユダ書簡については、先に書かれたユダ書簡が、ヤコブ書簡と同様、パウロ的キリスト教に対して批判的なスタンスをとっている（「ユダ」は「ヤコブ」の弟であり、この偽名自体がヤコブ書簡との親近性を示している）一方、ユダ書簡を下敷きにして作成された第二ペトロ書簡は、その批判の色合いを薄めて、やや親パウロに近づいている（ペトロの偽名はそのことを示唆する）と言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 辻 学
2. 発表標題 偽書としての第一ペトロ書：その成立事情をめぐって
3. 学会等名 日本聖書学研究所
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Manabu Tsuji
2. 発表標題 1 Peter as a Pseudonymous Letter: On its Historical Background
3. 学会等名 Asia Pacific Liaison Committee, Society for New Testament Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Manabu Tsuji
2. 発表標題 Suffering as a Christian' (1 Peter 4:16): Christian Identity in the early Christian Mission
3. 学会等名 Studiorum Novi Testamenti Societas (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 辻 学
2. 発表標題 福音の継承？ 第二パウロ書簡における福音理解
3. 学会等名 シンポジウム「我は福音を恥とせず：新約聖書における福音理解」（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 佐藤司郎・吉田新(編)、辻 学、ペーター・ランペ、出村みや子、金子晴勇、野村信、原田浩司、川島堅二、阿久戸義愛、藤原佐和子、出村彰、佐々木勝彦、鐸木道剛	4. 発行年 2018年
2. 出版社 教文館	5. 総ページ数 460 (うち69-92頁を担当)
3. 書名 福音とは何か：聖書の福音から福音主義へ	

1. 著者名 日本基督教学会北海道支部(編)、阿部包、山我哲雄、辻 学、戸田聡、土屋博、安酸敏真	4. 発行年 2016年
2. 出版社 日本基督教学会北海道支部	5. 総ページ数 103 (うち43-62頁を担当)
3. 書名 21世紀のキリスト教と聖書	

1. 著者名 William Loader, Boris Repschinski, Eric Wong, Jonathan W. Lo, Masashi Sawamura, Eugene Park, Sin Pan Ho, Rachael Tan, Chun Li, Teresa Kuo, Manabu Tsuji, Yang Yan, David Chengxin Li	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Innsbruck University Press	5. 総ページ数 266 (うち207-230頁を担当)
3. 書名 Matthew, Paul, and Others: Asian Perspectives on New Testament Themes	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----